

「物の怪」による病 — 『源氏物語』 から歴史物語へ —

小笠原愛子

平安中期の仮名散文中の「もののけ」という語は、全てが病を語る文脈で用いられ、『源氏物語』には、病床に駆り出された物の怪が心中を述べる場面が繰り返し描かれる。作中で描かれる物の怪は理を外れた救済され得ない存在で、物の怪に苛まれる人物は、恨みを負うべき悪行を為した人物としてではなく、気の毒な病人として描かれている。一方、歴史物語には、正当な主張を為す物の怪や、崇られる人間の側に相応の罪科が認められる事例等、『源氏物語』との相違点が見出せる。これは、物の怪による病及び物の怪への認識が変化したことの表れである。

キーワード：『源氏物語』, 物の怪, 病, 『栄花物語』, 『大鏡』, 『今鏡』

1. はじめに：「もののけ」と「病」

本稿で取り上げるのは、『源氏物語』及び平安時代の歴史物語における「物の怪」の描かれ方である。

平安時代の仮名散文において、「もののけ」という語は、病を語る文脈にのみ見られる。折口信夫氏は、その語誌について、「もの（＝霊）」による「け（＝病気）」であって、元来は霊物そのものよりも、霊物による病を指していたと述べられた。

〈折口信夫による講義〉

怨霊はものゝけといふ語で表されてゐる。ものは靈魂を意味し、けは胸のけ脚のけなど言ふ様に、病気を意味するから、ものゝけとは「靈魂の病気」と言ふ事である。しかし、後にはものゝけと言へば、鬼であり、或は精霊である。

（『国文学』二三一）⁽¹⁾

『源氏物語』と同時期に成った『枕草子』には、「病は」として「物の怪」が挙げられる。

〈『枕草子』「病は」〉

病は、胸。物の怪。脚のけ。はては、

ただそこはかたなくて物食はれぬ心地。
（「病は」318～319）⁽²⁾

『枕草子』『源氏物語』以前の仮名散文作品に見られる「もののけ」という語も、管見の限り、病に関わるもののみである。

〈『宇津保物語』「吹上 下」〉

かかるほどに、大將殿の宮あこ君、物の怪つきていたくわづらふ。とかくすれども怠らず。この阿闍梨につけてまつれば、かしくいたはりてやめつ。
（「吹上 下」①540～541）⁽³⁾

上の引用本文は「物の怪（が）憑きて」と解釈しているが、「病づく」等に見られる、「そういう状態や趣を帯びる」意の接尾語「つく」が後接した、「もののけづく」（「もののけ」のような状態になる）と解することもできる。

〈『蜻蛉日記』〉

日ごろなやましようて、咳などいたうせらるるを、ものけにやあらむ、加持もこころみむ、……（126）⁽⁴⁾

ひどく咳込んでいるのを「もののけ」であろうかと推察しており、これも病を指す例で

ある。

〔『大和物語』百五「うぐひすの声」〕
 中興の近江の介がむすめ、もののけ
にわづらひて、浄蔵大徳を験者にしけ
 るほどに、人とかくいひけり。なほし
 もはたあらざりけり。(329)⁽⁵⁾

『源氏物語』に見られる「虐病にわづらひ」⁽⁶⁾等の「〈病を表す体言〉+にわづらふ」という例から、この「もののけ」もそのように理解することができる。

2. 『源氏物語』における「物の怪」

2.1. 「もののけ」による病

『源氏物語』における「もののけ」も、やはり病と関わる文脈にのみ見られることが、藤井由紀子氏によって指摘されている⁽⁷⁾。

『源氏物語』における最初の霊物出現場面として言及されることが多いのは、「夕顔」巻の、某院で逢瀬を持った源氏と夕顔の前に、女の霊が現れる場面である。少し寝入っていた源氏は、枕上に「いとをかしげなる女」(「夕顔」①164)が座り、恨み言を述べながら傍らで寝ている夕顔を起こそうとすることを見て、「ものに襲はるる心地」(同)で目を覚ます。夕顔は源氏の隣で息絶えており、源氏は「物にけどられぬるなめり」(同167)と狼狽する。夕顔の頓死はこの女の霊によるものであるように見える。瞬く間に死に至った様子は、少なくとも「病死」とは言い難いことと関連して、この霊物が「もののけ」と呼ばれないことには注意しておきたい。

先に引用した場面の後、源氏が病臥し、「むげに弱るやう」(同181)に、「二十余日いと重くわづら」(同182)っていた様を見た人は、「物の怪なめり」(同183)と考えている。二十日余りにわたる患いが「病」と見なされて「物の怪」という語が用いられているのである。

この他にも、源氏の加療に当たった大徳が、病状を「(瘡病だけでなく)御物の怪など加

はれるさま」(「若紫」①205)と述べる例や、藤壺が懐妊に気づかなかった理由を、「物の怪のまぎれ」(同233)と述べる例など、体調不良を「もののけ」と呼んでいる例は多々見られる。『源氏物語』における「物の怪」も、全てが病について述べる文脈に見られ、病の原因となる霊物、或いは病を指す語である。

2.2. 駆り出されて心中を述べる「物の怪」

『源氏物語』には、人を病ませる「物の怪」が、その病床で加持祈祷によって駆り出され、生者をよりましとして胸中を述べる場面が繰り返し描かれている。特に六条御息所の霊が光源氏の妻達の病床で恨みを述べる場面は長大で、その描写も臨場感と精彩に富んでいる。

懐妊中の葵上は「御物の怪めきていたうわづらひ」(「葵」②31)、「御物の怪起こりていみじうわづらひたまふ」(同35)等と、物の怪にひどく苦しめられている。また、「物の怪、生霊などいふもの多く」(同32)出現する中に、「片時離るるをりもなきもの」(同)がおり、それは「いみじき験者」(同)にも従わず、「執念きけしきおぼろけのものにあらずと見え」(同)たと述べられる。以下に引く場面で、これが御息所であることが明らかになる。

〔六条御息所の生霊〕

……にはかに御気色ありてなやみた
 まへば、いとどしき御祈禱数を尽くし
 てせさせたまへれど、例の執念き御物
 の怪一つさらに動かず、やむごとなき
 験者ども、めづらかなりともて悩む。
 さすがにいみじう調ぜられて、心苦し
 げに泣きわびて、「すこしゆるべたまへ
 や。大将に聞こゆべきことあり」との
 たまふ。「さればよ。あるやうあらん」
 とて、近き御几帳のもとに入れたてま
 つりたり。……(中略)……(葵上の
 口から)「いで、あらずや。身の上のい
 と苦しきを、しばしやすめたまへと聞
 こえむとてなむ。かく参り来むともさ

らに思はぬを、もの思ふ人の魂はげに
あくがるものになむありける」とな
つかしげに言ひて、

なげきわび 空に乱るる わが魂を
結びとどめよ したがひのつま
とのたまふ声、けはひ、その人 (= 葵上)
にもあらず変りたまへり。いとあやし
と思しめぐらすに、ただかの御息所な
りけり。あさましう、人のとかく言ふ
を、よからぬ者どもの言ひ出づること
と、聞きにくく思してのたまひ消つを、
目に見す見す、世にはかかることこそ
はありけれと、疎ましうなりぬ。あな
心憂と思されて、「かくのたまへど誰と
こそ知らね。たしかにのたまへ」との
たまへば、(葵上の様子は) ただそれ (=
御息所) なる御ありさまに、あさまし
とは世の常なり。人々近う参るもかた
はらいたう思さる。 (葵② 39～41)

二重傍線部で、御息所は「こんなふう^に葵上の所へやって来ようという意図は全くなかったが、物思いのため魂が彷徨い出るとい^うのは本当であった」と述べている。この後の場面で描写される生身の御息所も、「あやしう、我にもあらぬ御心地」(同 42)で、身体に加持祈祷で用いる芥子の香がしみついてることから、自分が生霊となったことに思い至って「我が身ながらだに疎ましう」(同)と思ひ悩む。ここでは、御息所は生身の時と同様の人格を有している一方で、その遊離魂は彼女自身にとっても制御不可能なものとして語られている。

次の引用箇所では、数十年後、紫上の病床に表れた御息所の死霊を「昔見たまひし物の怪」と述べている。

〈紫上危篤の病床に出現した

御息所の死霊の発言〉

(物の怪は) いみじく調ぜられて、「人はみな去りね。院 (= 光源氏) 一ところの御耳に聞こえむ。おのれを、月ごろ、調

じわびさせたまふが情なくつらければ、同じくは思し知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身をくだきて思しまどふを見たてまつれば、今こそ、かくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさでつひに現はれぬること。さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただ、昔見たまひし物の怪 (= 六条御息所)のさまと見えたり。……(中略)……

(御息所)「中宮 (= 娘) の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔けりても見たてまつれど、(私は死んで) 道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、(私が)生きての世に、(あなたが私を)人よりおとして思し棄てしよりも、(あなたが)思ふどちの御物語のついでに、(私のことを)心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへとこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。この人 (= 紫上)を、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど、(あなたは)まもり強く、いと御あたり遠き心地してえ近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべる。よし、今は、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ。修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞えねば、いと悲しくなむ。……(中略)……」など、言ひ続くれど、物の怪に對ひて物語したまはむもかたはらいた

ければ、封じこめて、上をば、また他方に忍びて渡したてまつりたまふ。

(「若菜 下」④ 235～237)

物の怪は、娘への後見に感謝すべきとはわかっているが、死んで「道異に」なったので源氏への恨めしさによって来てしまったこと、紫上を憎んでいるわけではないが、光源氏には強い「まもり」があるので近づけないこと、自分の「罪」を軽くするような仏事を営んでほしいこと等を訴えている。この後、源氏は、物の怪の懇願を容れて仏事を営む。

〈六条御息所のための法華経供養〉

物の怪の罪救ふべきわざ、日ごとに法華経一部ずつ供養せさせたまふ。日ごとに、何くれと尊きわざせさせたまふ。(紫上の)御枕上近くても、不断の御読経、声尊きかぎりして読ませたまふ。(御息所の物の怪は)現はれそめては、をりをり悲しげなることどもを言へど、さらにこの物の怪去りははず。

(「若菜 下」④ 242)

しかし物の怪は、「日ごと」の供養によっても成仏できず、女三宮の産褥にも出現する。

〈女三宮を出家させた物の怪の発言〉

後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ日ごろさぶらひつる。今は帰るなむ」とてうち笑ふ。いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらむ、と思すに、いとほしう悔しう思さる。(「柏木」④ 310)

死霊は源氏への恨みと害意を露わにして「源氏が、紫上を死なせずすんだと思っていられしやのが腹立たしいので、こちらに潜んでいたのだ。女三宮を出家させてやって満足したのでもう帰るとしよう」と勝ち誇って帰っていく。源氏の供養は効果がなかったのである。

この他、病床で駆り出された物の怪が発言する様が描かれるのは、続編で、浮舟に憑いた物の怪が、横川僧都の加持に負けて退散する場面である。駆り出された物の怪は、自分がかつて「法師」であったこと、「恨み」を抱いて漂泊するうちに宇治の八宮邸に住みつき、大君を取り殺したこと、浮舟が「我いかで死なん」(「手習」⑥ 295)と希死念慮を抱いていたのに乗じて連れ出したが、浮舟に観音の加護があったため僧都の調伏に負けてしまったこと等を述べる。おそらくは死後数十年以上を経過しているこの物の怪の「恨み」は具体的に述べられていないが、御息所同様、解決不可能な恨みであろう。また、浮舟も宇治大君も、宇治邸にいたがために物の怪に憑かれたのであり、この物の怪の恨みを負うべき行いを為したと語られているわけではないという点でも、正編で御息所の物の怪に苛まれた女君達と同様である。

「葵」巻で、御息所が生霊となった直接の契機は車争いであったが、御息所の葵上に対する嫉妬や恨みは本文中に述べられてはいない⁽⁸⁾。生前の御息所は、意図して葵上のもとに赴いたわけではないと語られていたし、死霊となって紫上の病床に現れた際も「紫上が憎いのではない」と述べていた。御息所は、生前も死後も、源氏への恨みを抱いてはいても、源氏の妻達を憎悪しているとは語られていないのである。

2.3. 「物の怪」に憑かれる病人

次に引くのは、長年物の怪に悩まされている髭黒大将北方(紫上の異母姉妹)についての記述である。

〈髭黒大将北方に憑く執念き物の怪〉

女君(=北方)、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王のいみじうかしづきたてまつりたまへる、おほえ世に軽からず、御容貌などもいとようおはしけるを、あやしう執念き御物の怪にわづらひた

まひて、この年ごろ人にも似たまはず、
うつし心なきをりをりを多くものしたま
ひて、御仲もあくがれてほど経にけれ
ど、やむごとなきものとは、また並ぶ
人なく思ひきこえたまへるを、……

(真木柱③ 357)

北方は、本来は世評も高く容姿も優れていたのに、物の怪のせいでこの数年来尋常でない様子であった、とされている。

次の引用部分でも、物の怪の発作が起きる直前まで、新しく設けた他の妻のもとへ出かける夫の身支度を整える様が描かれ、控えめで従順な人柄と哀れさが印象付けられている。

〈髭黒大将北方の物の怪の発作〉

……正身（北方）はいみじう思ひしづ
めてらうたげに寄り臥したまへり、と
見るほどに、にはかに起き上がりて、
大きな籠の下なりつる火取をとり寄
せて、殿の背後に寄りて、さと沃かけ
たまふほど、人のやや見あふるほども
なう、あさましきに、あきれてものし
たまふ。…（中略）……うつし心にて
かくしたまふぞと思はば、またかへり
見すべくもあらずあさましけれど、例
の御物の怪の、人に疎ませむとする事
と、御前なる人々もいとほしう見たて
まつる。

(真木柱③ 366)

夫に灰を浴びせるという暴行も、北方が人から疎んじられるように仕向ける「物の怪」のせいであるとして、人々は「いとほしく」思っている。この「執念き御物の怪」が北方に憑く理由は述べられず、彼女は恨まれるべき人物ではなく、同情されるべき病人として語られている。

2.4. 「物の怪」と呼ばれない霊

源氏の父院は、遺命に背いた息朱雀帝の夢枕に立って叱責する。その後、朱雀帝は目を病み、夢告を無視した弘徽殿大后も病を得る。

〈朱雀帝の夢枕に立った故父院の霊〉

その年、朝廷に物のさとししきりて、

もの騒がしきこと多かり。三月十三日、
雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の
御夢に、院の帝、御前の御階の下に立
たせたまひて、御気色いとあしうて睨
みきこえさせたまふを、かしこまりて
おはします。聞こえさせたまふことど
も多かり。源氏の御事なりけんかし。
いと恐ろしういとほしと思して、后に
聞こえさせたまひければ、「雨など降り、
空乱れたる夜は、思ひなしなることは
さぞはべる。軽々しきやうに、思し驚
くまじきこと」と聞こえたまふ。

睨みたまひしに見合はせたまふと見
しけにや、御目にわづらひたまひてた
へがたう悩みたまふ。

……（中略）……大宮もそこはかとな
うわづらひたまひて、ほど経れば弱り
たまふやうなる、内裏に思し嘆くこと
さまざまなり。「なほこの源氏の君、ま
ことに犯しなきにてかく沈むならば、
かならずこの報いありなんとなむおほ
えはべる。今はなほもとの位をも賜ひ
てむ」とたびたび思したまふを、「世
のもどき軽々しきやうなるべし。罪に
怖ぢて都を去りし人を、三年をだに過
ぐさず赦されむことは、世の人もいか
が言ひ伝へはべらん」など、后かたく
諫めたまふに、思し憚るほどに日重な
りて、御なやみどもさまさまに重りま
さらせたまふ。

(「明石」② 251～253)

朱雀帝は父院と目を合わせてから眼病を発症し、「たへがたう悩む」。父院の霊が眼病を引き起こしているのだが、この霊は「物の怪」とは呼ばれていない。

〈故院の叱責を受けて病む

弘徽殿大后と朱雀帝〉

大后、御なやみ重くおはしますうちにも、つひにこの人をえ消たずなりなむことと心病み思しけれど、帝は、院の

御遺言を思ひきこえたまふ、ものの報ひありぬべく思しけるを、なほし立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。時々おこりなやませたまひし御目もさはやぎたまひぬれど、おほかた世にえ長くあるまじう、……

(「澹標」② 279～280)

朱雀帝が源氏を召還し、その地位を回復させると、眼病は平癒した。この父院の霊の要求は正当で、その要求に従えば霊障は解決するということであり、先に見た「物の怪」とは対照的である。

2.5. 『源氏物語』の「物の怪」

『源氏物語』における「物の怪」の描かれ方をまとめると、以下ようになるであろう。

- 心身の不調をもたらす霊物である。
- 救済・成仏は難しい。
- 憑かれた病人は、物の怪に恨まれるべき人物としては語られない。

物の怪によって病む人物が、「恨まれるべき人物」ではなく、ひたすら「気の毒な病人」として描かれているのは、人間にとっての「病」が、そもそも外部からもたらされる災いであることに照らせば自然である。『源氏物語』における「物の怪」は、「病」の一つとして位置づけられており、「虐げられた存在による報復としての霊障」という認識は、少なくとも前面には出ていないといえそうである。

3. 『栄花物語』における「物の怪」

3.1. 政治的敗者の「物の怪」

『栄花物語』には、政治的敗者が物の怪となって祟り、勝者側の病人や産婦を苦しめる場面が繰り返し語られる。物の怪が加持によって駆り出され、恨みを述べる場面は、『源氏物語』に描かれたものに似た様相を呈している。

九条殿師輔との外戚争いに敗れ、失意のうちに没した藤原元方が九条流の人々に祟る様

は繰り返し語られ、この元方の「いとうたてき御物の怪」(巻第一月の宴① 34)⁹⁾により、師輔の孫である冷泉帝は正気でないことが多く、その祟りは「御修法あまた壇にて、世とともによるづに」(同)行っても「験なし」(同)であったという。生来美しい皇子であった冷泉帝の狂気はひたすら同情的に語られ、「いとほし」という語が繰り返される。また師輔の長女である安子の産褥にも元方の物の怪が現れて死に至らしめている。病に関わる点、執拗に祟り、解決が困難な点、憑かれた側に同情的に描かれる点等も『源氏物語』と共通している。

元方と並んで出現頻度が高いのは、堀河殿藤原顕光と、その娘延子の物の怪である。延子は春宮敦明親王妃であったが、親王は道長方の権勢に圧されて春宮を辞退し、道長の娘寛子の婿となった。外戚への希望と婿・夫を奪われた顕光・延子父娘は相次いで亡くなり、道長の娘達に祟る。

〈寛子を取り殺す堀河殿と延子の物の怪〉
(瀕死の寛子が)戒受けさせたまひて、殿の御前の袈裟、尼上の御衣など、ただ御上にとりおこなひたてまつらせたまふ。ただよるづ夢の心地のみせさせたまふ。東宮・中宮の大夫殿、中納言など、あはれにしみじう思しまどひ、物にあたりたまふ。御物の怪どもいといみじう、「し得たり、し得たり」と、堀河の大臣、女御、諸声に「今ぞ胸あく」と叫びののしりたまふ。……(中略)……暁方に、「ただ今なん果てさせたまひぬる」とある御消息を聞きめす御心のほど、思ひやりきこえさすべし。……(中略)……さてもあさましかりける堀河の大臣の女御の御有様かなと、殿も院も思しめせど、「後の悔」といふことのやうになん。をりしも中将殿の上(=道長女尊子)も物の怪にいみじく悩ませたまへば、これをいと恐ろし

きことに殿の御前思さる。それもこの
同じ御物の怪の思ひのあまりなるべし。
それもいと恐ろしく思さるなり。

(巻第二十五みねの月② 481 ~ 482)

堀河殿と延子は、寛子を取り殺したばかり
でなく、寛子の姉妹である尊子にも祟り、次
に引く場面では、寛子の異母姉妹である嬉子
の産褥にも行こうと宣言している。

院(小一条院)は、女御(=寛子)の
御悩みのをり、堀河の大臣の、「督の殿
(=嬉子)の御産屋にかならず参りて見
たてまつらん」とありしを、人知れず
つねに恐ろしう思し出でさせたまふ。

(巻第二十五みねの月② 491)

堀河殿と延子の物の怪は、宣言した通りに
嬉子の産褥にも出現し、赤裳瘡を患ってもい
た嬉子は皇子出産後に亡くなってしまふ。

更にこの物の怪は、嬉子の姉である枇杷殿
妍子の病床にも出現する。

〈妍子の病床に出現した物の怪〉

……御物の怪は、堀河の大臣(=顕光)
の御けはひに、女御(=延子)さしつ
づき出でたまひて、言ひつづけたまふ
ことどもいと恐ろし。また、督の殿(=
嬉子)の御けはひにやと見ゆるもさし
申させたまへれば、上の御前あはれに
いみじう泣かせたまふ。それはとかく
思ひきこえさせたまふにあらねど、道
異にならせたまひぬる人はかくのみあ
るわざなるぞ、あはれに心憂きや。

(巻第二十九たまのかざり③ 115 ~ 116)

かつて堀河殿や延子に祟られた故人である
嬉子までが出現し、次女妍子の病床に、亡き
四女嬉子の物の怪を見た母倫子の惑乱が語ら
れる。「道異に」なってしまった人(死者)は、
道理に反して物の怪として現れてしまふ、と
いう語り手の言は、『源氏物語』「若菜下」の
御息所の死霊の言に似ている。

3.2. 馴染みの「物の怪」

前項と同様、政治的敗者が勝者側に執念く

崇る例ではあるが、毎度の物の怪の要求に従
ううちに「得意」、つまり馴染みになって色々
なことを教えてもらっていた、という特殊な
事例が、以下の小松僧都隆円の物の怪である。
同じ物の怪が執拗に祟る点は『源氏物語』と
同様であるが、その物の怪との間に一種の人
間関係とでもいふべきものが構築されている
点は、『源氏物語』に比して、「物の怪」像に
登場人物としての個別の人格が色濃くなって
いるとも解せる。

〈教通北方の産褥に出現した隆円の霊〉

この殿には、小松僧都の霊の、はじめ
はこの御産屋(=以前の出産)などの
をりはいと恐ろしかりしかど、それを
よるづにいひのままにせさせたまひし
ほどに、いみじき御得意になりて、そ
れぞこの年ごろ何ごともいとよく告げ
きこえさせつるも、それらも音なきを、
殿はあやしくおぼつかなく思しめすほ
どに、「御湯まゐらん」とあれば、持て
まゐりたりけるをきこしめして、やが
てもものたまはせずならせたまひぬ。
……(中略)……

例はさもなきに、御みづから物の怪
ただ出で来に出で来れば、いとかたは
らいたしと思しめして、「なほ人に移
さばや」とのたまはずれど、そこらの
僧心を合はせてののしり、加持まゐり
て、こと人に移せど、なほ御心地同じ
やうなれば、集まりて加持まゐるほど
に、例もつきならひたる女房に小松僧
都現れて、「この加持とめよ。あなかし
こあなかしこ、あやまつな。ただひき
声を読めひき声を読め」と言へば、殿、
「この物の怪のかくいふに、あるやうあ
らん。この加持とどめて、経なれ経な
れ」とのたまはず。かくいふは正月五
日なり。殿いみじう制せさせたまへば、
加持とどめて、そこらの僧ひき声を読
みたり。そのほどのおどろおどろしさ

は推しはかるべし。心誉僧都も誰も、御物の怪の堪へがたげなりつるものを、ただ同じごと加持をまるらでと、口惜しう思ふほどに、さこそそのしりしかど、やがて絶えいらせたまひぬ。あさましくゆゆしなども世の常なり。

(巻第二十一後くるの大將 ② 378～381)

小松僧都の指示に従って加持を止めた結果、北の方は亡くなってしまった。これまで「得意」として信用を得ておいて、最後に騙して命を奪ったようにも見える。小松僧都は、道長らに敗北した中関白家の子息(道隆の子息)であり、やはり敗者が勝者に祟った例といえる。なお、「加持をやめて読経をせよ」と要求する点は、『源氏物語』「葵」巻の御息所に似ている。

3.3. 正当性を有する「物の怪」

『栄花物語』には、正当な主張を為す霊が「物の怪」と呼ばれる例が存する。以下に引くのは、頼通の病床に、彼の舅である故具平親王の物の怪が出現する場面である。

〈頼通の病床に出現した具平親王〉

御前近くさぶらふ女房の、日ごろかかることもなかりつるにぞ、御物の怪移りぬる。いと気高くやむごとなき御有様にて、いみじく泣く。僧たち皆しめりて聞きさぶらふに、大將殿に御湯などまるらせたまひて、上の御前ただ兎のやうに抱きたてまつらせたまひて、いみじと思しめしたることかぎりなし。

御物の怪、殿の御前を「近く寄りたまへ」と申せば、寄せたまへれば、「己れは世にはべりしをり、いと痴れたりなどは人におほえずなんはべりし。またあはあはしく出で来て、人なかにかやうのものなど聞ゆる、いとめめしくなどあることなれど、子のかなしさはおのづから大臣(あなた=道長)も知りたまへればなん。この大將(=頼通)を、(私が)世にはべりしに、心ざし

ありて、いかでなど思ひきこえしかども、命絶えてかくはべるばかりにこそあれど、天翔けりてもこのわたりを片時去りはべらず、(私は)いと罪深からぬ身なれば、何ごともみな見聞きてなんはべるを。この大將(=頼通)をやむごとなき方(=三条天皇の婿)に召し入れぬべく思しかまふめるを、(私は)日ごろやすからぬことに思ひきこえはべれど、さはれ、ただ任せきこえて見むと思ひはべるに、いとやすからぬこと(=頼通と禊子内親王との婚姻が成立しそう)に思えて、みづから聞えんとばかり思ひしに、いとほしうこの君のかくおどろおどろしうものしたまへば、いと心苦しきになんかくも聞ゆる」とのたまはするに、故中務宮の御けはひなりけりと心得させたまひて、殿かしこまり申したまひて、「すべてかへすがへすことわりにはべれば、かしこまり申しはべり。さらにこれ(=頼通と禊子内親王の縁談)はかの男(=頼道)の怠りにもはべらず、またみづからのとがにもはべらず、おのづからはべることなり」と申したまへば、「いかに、さは子はかなしう思すや思すや」とたびたび申したまふは、このこと(頼通と禊子内親王の縁談)を長く思し絶えねとなるべし。殿の御前、「よし御覽ぜよ。げにさはべることなり」と、ことわりたびたび申させたまへば、「さらば今は心やすくまかり帰りなん。さりとも虚言は大臣のたまはじとなん思ひはべる。もしさらば怨み申すばかり」とて、さりぬべき法文の尊きところなどうち誦じたまふ。まことに違ふところなくて、しばしうち寝て、さめぬ。なごりもなく御心地さはやかにならせたまひぬれば、殿の御前、上などうれしく思しめされたり。この(多くの)

御物の怪ども、この（具平親王の）御物の怪を豪家にてさまざまあるにこそありけれ、この御物の怪去りぬれば、かきさまし音するものなし。

（巻第十二たまのむらぎく② 61～64）

具平親王の「御物の怪」は、「いと気高くやむごとなき御ありさま」で、僧達も静まってその発言に耳を傾ける。生前から世間の信望もあった自分が、「子のかなしさ」故に物の怪となって出現したこと、頼通を信頼して愛娘隆姫と娶せたこと、自分は「いと罪深からぬ身」であるから、死後のことも見聞きしていることなどを整然と語っている。『源氏物語』「若菜 下」の御息所の死霊が、自分は死んで「道異に」なってしまったので娘のことよりも自らの恨めしさがまさってしまったことや、罪深い身には「尊きこと」も全く聞こえないこと等を述べていたのを裏返した描き方とも見える⁽¹⁰⁾。

親王は、頼通や道長を信頼し静観していたが、案に相違して頼通と禊子内親王の婚姻が成立しそうに見えたので、「みづから」申し述べに来たのだと言い、「子のかなしさ」は同じであろう、と理と情の両面から道長に迫る。そして道長が親王の要求を容れると、物の怪は退散して頼通も平癒する。『源氏物語』で御息所の物の怪がひたすら「あさまし」と評され、死後も「罪」に苦しむ、救われない存在として語られていたのとは対照的である。

なお、親王の霊は、この後、頼通の子を産んだ召人（故式部卿宮の娘）と頼通の関係が絶えたことを述べる部分でも「故式部卿宮の御物の怪」（巻第三十譚合③ 243）と呼ばれている。

「いと罪深からぬ」故に、死後も認識能力を保ち、尊重すべき正当な要求を為すために出現する霊が「物の怪」と呼ばれるのは、『源氏物語』には見られない例である。『源氏物語』において、父院の霊が「物の怪」と呼ばれて

いなかったことに照らせば、両作品において、「物の怪」と呼称される霊物の位置づけが大きく異なっていることが理解される。

4. 『大鏡』における「物の怪」

『大鏡』の「物の怪」の用例は、『栄花物語』に比して著しく少ない。『栄花物語』で、繰り返し九条殿の末裔の病床・産褥に出現した元方の死霊は『大鏡』でも言及されるが、病床で恨みを述べる場面が描写されることはなく、「さて後に、霊に出でまして、「その夜やがて、胸に釘はうちてき」とこそたまひけれ。」（『大鏡』地 師輔 167）⁽¹¹⁾と、「霊」の語を用いて、祟りが簡潔に述べられている。

小一条院が東宮を辞退したいと述べたのを、母宮が「御物の怪のするなり」（地 師尹伝 129～130）と祈祷させたのは、不合理な言動を「物の怪によって正気を失っているため」とするもので、『源氏物語』『栄花物語』にも同様の例が見えるが、『大鏡』の叙述は簡潔である。

以下に引く三条帝の眼病を語る部分では、「物の怪」の語が用いられており、「病」との繋がりもあるものの、発言のみが簡潔に語られる点等、描写の性質には『源氏物語』『栄花物語』との違いが顕著である。

〈三条帝の眼病と桓算の「物の怪」〉

院にならせたまひて、御目を御覧ぜざりしこそ、いといみじかりしか。……（中略）……この御目のためには、よろづにつくろひおはしましけれど、その験あることもなき、いといみじきことなり。……（中略）……御病により、金液丹といふ薬を召したりけるを、「その薬くひたる人は、かく目をなむ病む」など人は申ししかど、桓算供奉の御物の怪にあらはれて申しけるは、「御首に乗りゐて、左右の羽をうちおほひ申したるに、うちはぶき動かす折に、すこし御覧ずるなり」とこそ言ひはべりけ

れ。

御位去らせたましことも、多くは中堂にのぼらせたまはむとなり。さりしかど、のぼらせたまひて、さらにその験おはしまさざりしこそ、口惜しかりしか。やがておこたりおはしまさずとも、すこしの験はあべかりしことよ。されば、いとど山の天狗のしたてまつるとこそ、さまさまに聞こえはべれ。

(天 三条院 49～52)

物の怪の正体が「山の天狗」つまり外道に墮ちた僧の悪霊とされていること⁽¹²⁾、この桓算の物の怪が「翼で目を覆う」ことで後三条帝の目を病ませているのだと具体的に述べること等も、注目すべき特徴である。

5. 『今鏡』における「物の怪」

『今鏡』は『大鏡』に比して大部であるが、「物の怪」の語の用例は少ない。『今鏡』に見られる「物の怪」は3例である。

待賢門院が入内当日に「御ものけ、その夜になりておらせ給ひて、にはかに大事に」(「みこたち」「源氏の御息所」下290)⁽¹³⁾ 陥った際、行尊僧正が加持をし「ほどなくおこたらせ給」(同)と僧正の験力を語る部分では、『大鏡』同様、病床や物の怪の発言が直接描写されることはない。

また、不当に土地を奪われたことによってその一族に祟る物の怪が登場するのは、これ以前の物語に見られない事象である。

〈宗通・信通父子に祟る「家まさ」の物の怪〉

僻ごとにや、(信通は)わらはやみして失せ給ひにけるとぞ聞き侍りし。いと人の死なぬ病とこそ常は聞き侍るに。おほかたはこの(宗通の)御末、御ものけのこはくおはするにや、民部卿の失せ給ひけるほどにも、「家まさがありつるはまだあるか」などのたまはせければ、「さも侍らず。はかなくなりて年経侍りにしものは、いかでか侍らむ」

など、人申しければ、「うやかきて、まさしくありつるものを」とのたまひけるは。その家まさといふが親の譲りたる所を取り給ひけるを、辛く思ひけるほどに、「寄せ文を奉れ。預けむ」と侍りければ、喜びて奉りけれど、預からざりけるとぞきこえ侍りし。家まさとは、さねしげとて、式部の大輔とかきこゆるがをぢになむきこえし。故宰相の失せ給ひけるにも、「卿の殿おはしまさねば、さぶらはむとて」などいひて、出で来たりけるとかや。さてその所は、女尋ね出だして返さるるなどきこえ侍りし。後はいかが侍りけむ。

(「ふちなみ」下「旅寝の床」下30)

「家まさ」が土地を奪われた恨みで宗通とその末裔に祟ったために、宗通は臨終の床で「家まさ」の霊が平伏しているのを見、その息信通は「人の死なぬ」病である瘡病で没したという。引用部では「わらはやみ(瘡病)」への言及はあるものの、この瘡病の原因が物の怪であるとは明言されておらず、物の怪と病の結びつきはこれまでの物語ほど強固ではない。病床の様や物の怪の発言は描写されない一方、物の怪が恨みを抱く理由については具体的かつ詳細に語られており、そちらが話題の中心である。

この次には、宗通の父である俊家が「年老いたりける僧の知る所(=所領)」(「ふちなみ」下「旅寝の床」下32)を奪ったため、この一族はその僧の物の怪にも祟られていたという経緯が語られ、家伝の結びとして子孫が没落したことが述べられている。不当な行いによって恨みを負い、物の怪に祟られた事例であると理解すべきあり、これまでに見た先行作品とは大きく異なっている。

おわりに：「物の怪」による病

『源氏物語』では、物の怪に苛まれる病人は恨まれて然るべき不当な行いを為した人物

ではなく、同情されるべき病人として描かれていた。また物の怪となった人物の苦しみも語られるものの、それは人の理を外れた存在で、その救済は困難であった。『源氏物語』では、理にかなった霊は「物の怪」と呼ばれなかったのに対し、『栄花物語』では、理を外れず、寧ろ正当性の認められる主張を為す物の怪が描かれる。生者と継続的な関係を結ぶ物の怪が描かれることも含め、『栄花物語』の物の怪像には、登場人物としての人格が明確になっているといえる。次いで『大鏡』では、物の怪が病をもたらす具体的な方法が述べられ、『今鏡』では、崇られる人間の側に咎のある事例が語られている。このような変化は、「物の怪」に対する認識が、「病」から霊物としての存在、或いは霊障へとその重心を移していったことの表れであると考えることができる。

《注・引用文献》

- (1) 『折口信夫全集』第十四卷（折口博士記念古代研究所 1955年 中央公論社）
- (2) 本稿における『枕草子』本文の引用は、新編日本古典文学全集（永井和子氏・松尾聰氏 校注・訳 1997年 小学館）による。
- (3) 本稿における『宇津保物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集（中野幸一氏 校注・訳 1999年 小学館）による。
- (4) 本稿における『蜻蛉日記』本文の引用は、新編日本古典文学全集（伊牟田経久氏・木村正中氏 校注・訳 1995年 小学館）による。
- (5) 本稿における『大和物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集（高橋正治氏 校注・訳 1994年 小学館）による。
- (6) 新編日本古典文学全集『源氏物語』「若紫」（①199・同210）「末摘花」（①277）等。本稿における『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集（秋山虔氏・阿部秋生氏・今井源衛氏・鈴木日出男氏 校注・訳 1994～1998年 小学館）による。
- (7) 『日本古典文学史の課題』（2004年 和泉書院）
- (8) 今井上氏「六条御息所生霊化の理路—葵卷再読—」（『源氏研究』第8号（2003年4月））
- (9) 本稿における『栄花物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集（秋山虔氏・池田尚隆氏・福長進氏・山中裕氏 校注・訳 1995～1998年 小学館）による。
- (10) 藤原実資による『小右記』の当該日（長和4年12月13日）条には、頼通の病床に「故帥（＝藤原伊周）霊」が調伏されて「顕露」したと記されており、具平親王のことは見えない。
- (11) 本稿における『大鏡』本文の引用は、新編日本古典文学全集（加藤静子氏・橘健二氏 校注・訳 1996年 小学館）による。
- (12) 『小右記』には、内供奉を務め後に天台座主になれず憤死した賀静の怨霊であると記載されている。
- (13) 本稿における『今鏡』本文の引用は、『今鏡全釈』上下（海野泰男氏 昭和57年、同58年 福武書店）による。

Illness Caused by '*Mononoke*'
From '*Genji Monogatari*' to '*Rekishi Monogatari*'

Aiko OGASAWARA
Osaka Yuhigaokagakuen Highschool

Abstract

The term '*mononoke*' refers to a spirit that causes illness or illness itself caused by a spirit. In '*Genji Monogatari*', spirits called '*mononoke*' are impossible to control, and the illness caused by '*mononoke*' is impossible to cure. On the other hand, the spirits of '*rekishi monogatari*' are humanized and conscious. Some make legitimate demands, and if people comply with these demands, the psychic phenomena can be stopped. This difference shows that people's recognition of illness by '*mononoke*' changed.

Keywords : Genji Monogatari, Mononoke, Illness, Eiga Monogatari, Okagami, Imakagami